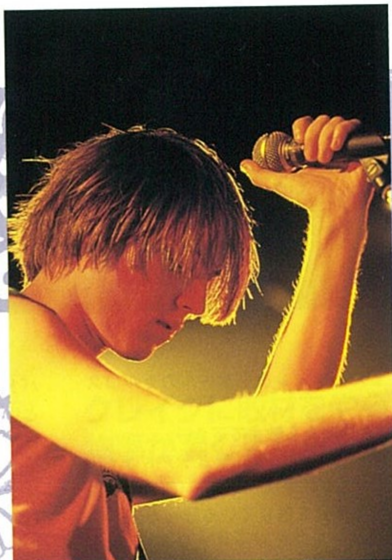
PHOTO BY SUSANNA HOWE







THE VINES





5月19日、渋谷クラブクアトロで行われたライヴにて。
PHOTOS BY TEPPEI

THE VINES

完璧なことなんて世の中には何もないよ。ただ……他のバンドのように存在出来たら楽だろうなぁとは思う

パトリック・マシューズ／The Vines　INTERVIEW：AI ANAZAWA

▶デビュー以来、来日を熱望されていながら今まで実現しなかったヴァインズが、とうとう初来日公演でやって来た。東京公演は、気まぐれなクレイグのステージ・パフォーマンスが賛否両論を呼び、おもしろかったと言える人も怒っちゃった人もいたようだが、今回の来日中クレイグがやらない分、せっせと取材に応えていたパトリックは、先が読めない彼の奇行に正直ウンザリといった様子だった。

――初の日本はどうですか？
パトリック・マシューズ（b.）：いい感じなんじゃない？まだ3日しか経ってないからなぁ。街中を歩いてても、おもしろいと思うよ。東京でのショーはあんまり良くなかったけど…。
――良くなかったみたいですね。私は行かなかったんだけど、いろんな人からいろんな話を聞いていますよ。どうしちゃったの？
パトリック：クレイグ（・ニコルズ、vo.／g.）が何ていうかその……
――バカタレ？
パトリック：グハハッ。そう。あの日の昼間っからね。ショーの最中も、日本はクソだとか何とかって言ったんで、ライアン（・グリフィス、g.）と俺が思わず楽屋に引っ込んじゃったんだよ。最初ライアンがいなくなって、俺は続けて弾いてたんだけど、ヘイミッシュ（・ロッサー、dr.）とタイミングが合わなくなっちゃってさ。でもクレイグのせいなんだよ。なのにヘイミッシュを怒鳴り散らすもんだから、俺もステージから下がったんだ。でもまた戻っていってショーは続けたんだけどね。
――そのショーを観た人の多くは、「F.T.W.」がショーのハイライトだったと言ってるみたいだけど。
パトリック：うん。それって最後にやった曲だよ。それまでは上手くいった曲もあれば、あんまり上手くいかない曲もあったりして…っていうかほとんど上手くいってなかったんだけど、最後で観客全員が歌ってくれてさ。不思議な感じだよ。
――念願の初来日での初公演だったのに、それがあんまり上手くいかなかったのは残念でしたね。
パトリック：まあね。あの日の午後からクレイグ以外の俺達は、"今日クレイグって何やってんだろーねー"って感じだったんだよね（笑）。確かにショーが上手くいかなかったのは残念だけど、完璧なショーがやれたとしたら、それはそれでおかしな話だったと思うよ。
――その日は何があったの？
パトリック：クレイグがレコード会社の人に凄く失礼でさ。他にも色々と面倒なトラブルを起こしてたんだよ（苦笑）。どこに行ってもみんなにやりにくい態度で。明らかにショーは上手くいかないだろうっていうのが予測出来てしまう状態だったんだ。
――あなたを含め、誰か彼を宥められる人はいないんですか？


PHOTO BY TEPPEI

パトリック：ん～、それがいないんだよね～。外部の人には、"君達、バンドのことを真剣に考えてる？恥ずかしくないの？何とか出来ないの？"って言われるけど、2年前、初めてツアーに出ようとしてたあの頃の俺達は、確かに状況を変えられるはずだって信じてた。でもあれから2年後の今、何とかしようとするだけ無駄だってことが分かったんだ。変えようとすればするだけ物事は悪化する一方だってね。でも今はさ、時差ボケのせいもあるし、ツアーも終盤だってことで全員が疲れ切ってるのが大きいと思う。クレイグがダダをこねるのもそのせいだと思うしね。ついこの間やったUKツアーが凄く順調にやれたから余計今の状況にはムカつくんだ。UKじゃ、ショー8本全てが最高だったんだよ。なのにここに来てこのザマだもんな…（苦笑）。

クレイグに取材をやらせないようにしたら物事が凄くスムーズに進むようになった

――クレイグ、日本じゃハッパが足りないからダダこねてるのかな。
パトリック：それもあるかもね。
――なんてガキンチョなんだ～っ！
パトリック：（笑）いやさ、イギリスからの長旅で疲れたし、みんな眠いし、ステージに立たなきゃいけないのが19時ってやけに早かったりするのもね…。
――UKツアーの前はアメリカをジェットとリヴィング・エンドと一緒に廻ったんですよね？リヴィング・エンドが先々週日本に来てたんだけど、あなた達のことを凄くいい奴らだって言ってましたよ。
パトリック：そうなの？あのツアーは、特に何もなく穏やかに、誰もがお互いに対しても親切な感じだったんだ。ニューヨークとヒューストンのショーは酷いもんだったけど…ヒューストンは初日だったから仕方ないにしてもね。リヴィング・エンドはいい人達だよ。彼らは誰よりも長くやってるバンドだから、俺としても見てるだけで凄く勉強になった。客の沸かせ方なんかやっぱプロだし、ツアーも最後の方に燃料切れになったりしないでちゃんとやれてるしさ。
――さっき、状況は変えられないし、良くしようとすると却って逆効果だって言ってましたけど、そんな状態でツアーじゃ大問題でしょ？それとも問題視しないようにあえて目を伏せてるわけ？
パトリック：いや、問題は問題だよ。でも最近だと、例えばクレイグに取材をやらせないようにしたら物事が凄くスムーズに進むようになったんだ。だからクレイグにはインタビューはやらせてないんだよ。あと、楽屋では出来るだけ物音を立てないようにするとかさ。そういう心がけのお陰でUKでは上手く行ったんだ。でもインタビューをやらないせいで、結果としてセールスに悪影響が出ちゃって。もうNME紙には全然載らないからね！
――何で？
パトリック：いや、今はイギリス産のバンドばっかり取り沙汰されてるじゃん？この間までは俺達の悪口ばっかり書いてたのが、最近は存在さえ認めてないみたいよ（笑）。笑えるよね、1、2年前はしょっちゅう俺達のこと取り上げてたくせにさ。別にそんなことで俺が個人的に傷付いたりするわけじゃないけど…やっぱり何のプロモーションもやらなかったらアルバムも売れないもんでさぁ。そうなると次のアルバムが作れなくなっちゃうし…っていうか、今までと同じようには作れなくなる。
――元々あなたがマクドナルドでバイトをしてた時にクレイグと知り合ってこのバンドを始めたわけですよね。その頃は、少なくとも一緒に音楽をやりたいと思う相手だったんでしょ？
パトリック：おもしろい奴だったよ。おとなしかったけどね。態度が悪くなっていろんなことをやらかすようになったのは、ソングライターになりたくて、親とケンカしながらも自分の思い通りにしたいって、したいようにするようになってから始まったんじゃない？…会った頃は今とは全然違う奴だったんだけどねぇ。
――人気者になって、益々悪化していった感じ？
パトリック：まあね。でもファースト・アルバム（「ハイリー・イヴォルヴド」）作りの頃からかなり酷かったんだけど。
――何よりも"ソングライターでありたい！"っていう思いが強すぎて、本当は家にいたいのにツアーなんて!って思っているのかもしれませんね。
パトリック：不思議なのがさ、バンドとして活動するならツアーもしなきゃいけないなんてことは、あいつだってとうの昔に受け入れたはずなんだよね。知ってる？あいつ、セカンド・アルバムがファーストほど売れてないこと、知らないんだよ（笑）。
――知らない？
パトリック：全然。全く。
――そういう話ってバンドメンバーとしてしないわけ？
パトリック：誰もしてないと思うよ。だってそんな話を始めたら口論になるの目に見えてるもん。だからきっと知らないんだろうなと憶測するところなんだ。でね、クレイグはそうとも知らず、インタビューもテレビ出演もラジオ出演もやらないことがセールスに貢献してると勝手に思い込んでるんじゃない？笑えるよね。それで……質問は何だったっけ？
――ツアーはこの仕事に付き物だということを彼はとうの昔に把握したはずなのに、ツアー楽しんでなさそうですね、って。

パトリック：最初からツアーはやりたくなさそうだったけど、ロブ・シュナッフ（プロデューサー）に"バンドならツアーはしなきゃいけない"って説得されたんだ。

――あなた自身はツアーをどう思ってるんですか？

パトリック：いいこともあるよね。世界中を観て廻れるんだからさ。でも…完璧なことなんて世の中には何もないよ。ただ……他のバンドのように存在出来たら楽だろうなぁとは思うよ。

もしかしたらレコード会社から契約を切られちゃうかもね

――そうですねぇ…でもあなたはヴァインズのメンバーになるという星の下に生まれてしまったわけだから。

パトリック：まあねぇ。でも例えばジェットなんか今凄くいい感じなんだよ。デビューしたてで初めてUKを廻ってた頃は、オーディエンスもほとんどいなくて、メンバーも殴り合いのケンカをやってたらしいけど…

――ジェットはアルコールとドラッグのやりすぎだったっていう話もあるけどね（笑）。

パトリック：それは今でもじゃない（笑）？なのに今は仲良く楽しくやってんだもんなぁ。まぁ最近じゃ酒の量も減ったとは言ってたけど。……物事、完璧には進まないものだねぇ。

――少しずつでもいい方向に向かってると言って欲しいけどなぁ。

パトリック：全然ムリ（笑）。ヘイミッシュは天然で楽天的だけど、それ以外の俺達は"もうイヤだ"って感じだから（苦笑）。クルーも、俺もライアンもね。

――じゃあ、いずれ我慢出来なくて辞めちゃうかもしれないと？

パトリック：6月にインキュバスのツアーでアメリカを一緒に廻る予定じゃん？その後フジ・ロックもある。それ以降は特に何も入ってないんだ。もしかしたらレコード会社から契約を切られちゃうかもね、フフッ。

――そんな…。

パトリック：そういうこともメンバー同士で話したりはするんだ。もちろんクレイグ抜きでのことだけど。だってこのザマだったら、次のアルバムを作りたいと言っても、誰も30万ドル（約3300万円）も払ってくれるわけがない。契約を切られたら、地味にアルバムを作ればいいだけの話ではあるけどね。ま、とりあえず8月以降になれば状況が変わるんだろうなとは思ってるよ。もしかしたらビッグ・デイ・アウト（オーストラリアのフェス）に出ることになるかもしれないし。

――医大に戻りたいな、なんて思ったりもするんですか？

パトリック：それはあるね。

――じゃあ、一応バックアップ・プランはあると？

パトリック：って言っても、本を書いて出版する立派な作家になるのと同じくらい非現実に近いことだと思うけど（笑）？バックアップ・プランと言っても、医者になるのはそう簡単に出来ることではないってことだよ。

――それは分からないんじゃないですか？バンドでここまでやってくるのだって、普通は出来ないことだもの。

パトリック：確かにね。

――でも今でもあなた自身は音楽が好きで情熱を持ってやっているわけですよね？

パトリック：うん、今でもおもしろいと思ってやってるよ。僕は元々情熱的な人間じゃないけど、音楽はずっとやりたいと思っていたことだから…。

――他に趣味や興味は？

パトリック：読書。昔から作家になりたいとは思ってて。でも実際書くのって難しいよ。

――今もまめに書いてます？

パトリック：あんまり。短いのは、前にロンドンにいる友達に渡して雑誌に掲載してもらったことがあるね。バーでタダで置いてある雑誌なんだけど、ソーシャリズムっていって、いろんなジャーナリストが記事を書いてるんだ。インターポールのカルロスも書いたりしてた。

――オススメの本があったら教えて下さい。

パトリック：ジョン・ロンソンの「ゼム：アドヴェンチャーズ・ウィズ・エクストリーミスト（原題）」。これは陰謀セオリーとそれを信じている狂った人達の話で、基本的にはユーモア・ジャーナリズムだね。あとはデヴィッド・セダリスは好きだよ。ニューヨーカー誌なんかに書いたりする人で、とにかく最高に笑えるんだ。彼はゲイで、エネルギー炸裂って感じの人でさ、彼が書いたものは読んでると思わず声を出して笑っちゃうんだ。

――あなたも彼のスタイルのような感じで書きたいんですか？

パトリック：どうだろうなぁ、まだノンフィクションなんて、モリッシーとロイ・オービソンについてのエッセイと、アル中に関するエッセイしか書いたことないからさ。野生ドキュメンタリーについても書きたいと思ってるところなんだ。

――真面目だなぁ。

パトリック：でもそこにユーモアを交えて書きたいとは思ってるから、そうだね、そういうスタイルを目指してるのかもしれない。

――是非あなたのエッセイも読んでみたいですね。ネットで探しても出てこないかな？

パトリック：ヘヴンリー・ソーシャルっていうバーに行かないと手に入らないと思う。ロンドンのレコード・レーベルが経営してるバーなんだ。レコード会社のくせにバーなんか持って飲んでるなんて安っぽいよな～（笑）。

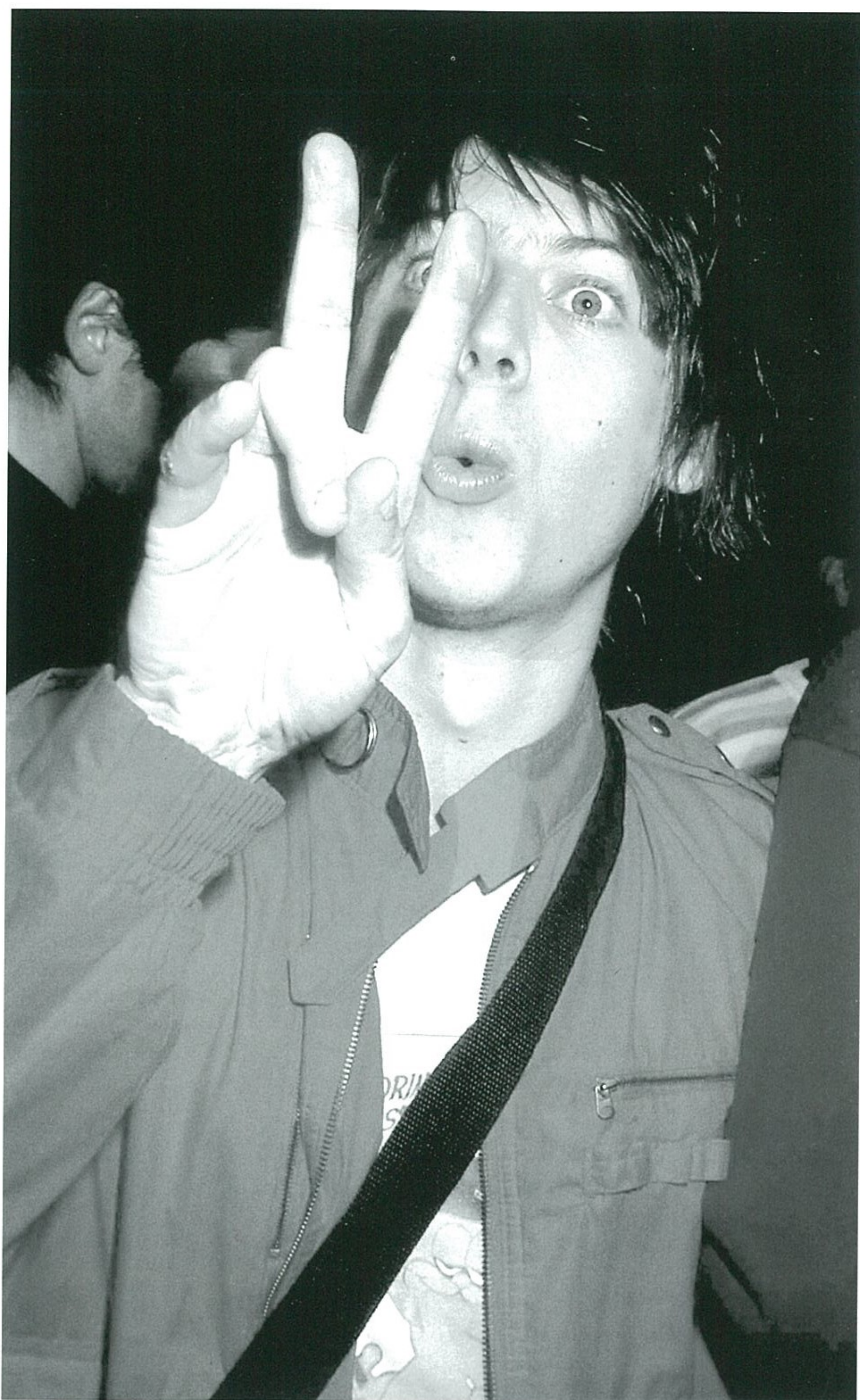
――今夜のショーは楽しみですか？

パトリック：ん～…ちょっと不安だよね。大丈夫だと思うけど。東京のパフォーマンスにしても、シドニーでやった時と比べたらそれほど酷くはなかったと思うし…だから大丈夫じゃないかな。ただ、やっぱり東京と同じような感じになるんじゃないかと危惧する部分は大いにあるかも。

――クレイグとは全然喋ってないんだ？

パトリック：誰も（苦笑）。

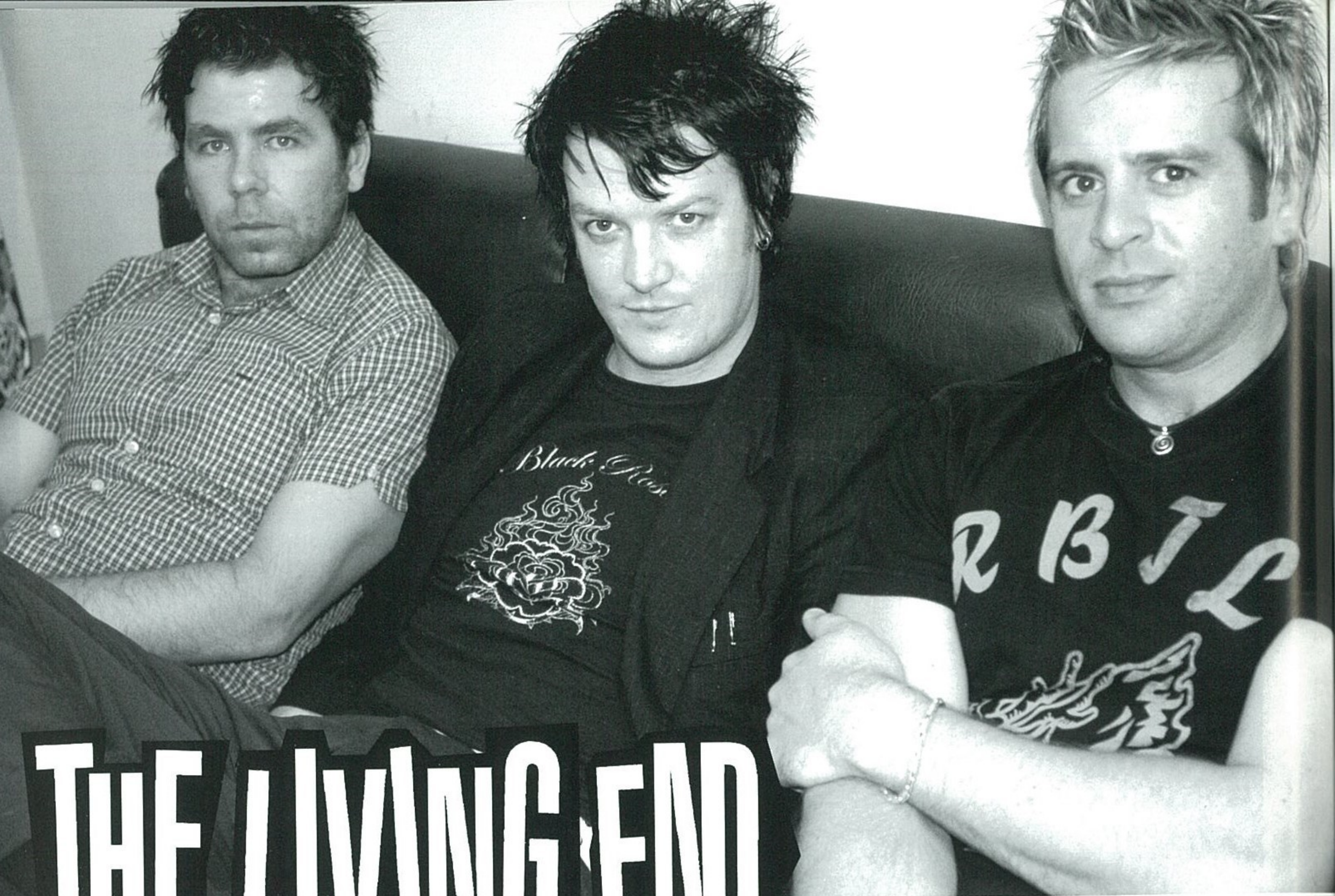
5月21日　大阪にて収録



ニューヨークにて、クレイグ。

PHOTO BY S&G

※来日記は97ページをご覧下さい。



THE LIVING END

L→R：スコット（b.／vo.）、クリス（vo.／g.）、アンディ（dr.）

今は人生に対してもっと感謝して過ごせる。セカンド・チャンスが与えられたことを本当に感謝してるんだ

クリス・チェニー／The Living End　INTERVIEW & PHOTOS：YUKO KATO

交通事故から奇跡の生還を果たしたクリス・チェニー。今では、"びっこでもひいてたら海賊みたいに眼帯しなきゃ"と冗談にするくらい、事故の痕跡を残していない。"もう来れないかもしれない…"そう思った日本にも戻ってきて、今回は名古屋はビッグなダイアモンドホールで公演だ。

——あの事故で人生が台無しになったかもしれなかったじゃない？人生に対する考え方が変わったりってことはあった？

クリス・チェニー（vo.／g.）：それはあるよ。あれこそ、人生が変わる経験だったと思う。俺のあの事故はまさにそういう経験だし、今振り返ってみると、その時よりももっとぞっとするし気が狂いそうに怖くなる。事故が起こった時は、とにかく激痛に耐えるのに必至で、そこまで考えられなかった。だけど今、あの事故で自分は死んでたかもしれないしってことを思うと、人生に対してもっと感謝して過ごせるんだよね。元々、バンドで世界中を廻れたりすることに対しては感謝してたし、今でも素晴らしいと思ってるけど、バンド以外の世界に関しては、セカンド・チャンスが与えられたことを本当に感謝してるんだ。それは今でも時々考えるよ。

——だけど事故に関しての曲は書いてないわよね？

クリス：うん、別に書いてないな。

——自分の人生にそんなにも影響があったのに？

クリス：直接的には書いてないけど、あの経験から学んだことを曲作りに活かしてはいるよ。これまでよりも絶対にいい曲を書こうと思って、今回は全てきちんと作ったんだ。100%後悔はないしね。これまでで一番ストロングなアルバムを作りたかったし、曲作りに関しても2番目にいい曲で妥協するんじゃなくて、最高のものを引き出せるように自分を追い込んだ。だって、これが俺達の最後のアルバムになることだってあり得るわけだからさ！曲がり角の向こうには何が待ち受けているのかなんて、誰にも分からない。だから自分が出来る時に、出来るだけ頑張って最高なものにしなきゃいけないって思うんだよ。

"俺達はみんな戦争が嫌いだ。戦争なんて最悪だよ"とだけ聞くとまるで5歳児のコメントだけど、まさに真実なんだ

——今回来日する前に、他のオーストラリアのバンド、ヴァインズやジェットと一緒に、「オージー・インベージョン・ツアー」としてアメリカを廻ったじゃない？アメリカでは、なぜかあなた達はパンク・バンドと思われてるのよね。

クリス：ああ。俺達のことをすぐにパンク・バンドって決めつける人は多いけどね、残念ながら。

——でも、どうしてだと思う？あなた達の音楽って、いろんな要素を持ってるじゃない。

クリス：うん、そうだけど、俺達がパンクの影響を受けてるからじゃないかな。だけどそのパンクの影響で他の要素が薄くなってるわけじゃないよ。クラッシュの影響も大だし、カントリーからだってインスピレーションを受けたりしてるからね。あと、ルックスも関係するかもしれない。ちょっとパンク風な服を着てる時もあるし…だけど、俺達をすぐにただのパンク・バンドって決めつけるのは凄く短絡的だと思うから、あまりいい気はしない。俺達は凄くバリエーションに富んでるからね。俺達は昔からいろんな要素をミックスしながらやってきて、このアルバムでは、バンドの多様性が表現出来てると思うな。

——「オージー・インベージョン・ツアー」はどうだったの？そもそも、ツアーに参加した理由は何だったのかしら。自分達を"オージー・バンド"として印象づけたかったの？

クリス：丁度俺達もアメリカでニュー・アルバムがリリースされる頃だったし、ヴァインズとも何度か一緒にプレイしたことあったし…ジェットとはプレイしたことないんだけどね。で、誘われた時には、いいチャンスだと思ったよ。いいチャンスだし、この3バンドで廻るのもいいんじゃないかと思った。オーストラリア音楽のショーケース的要素もあるけどね。普段と違うところと言えば、バックステージでオーストラリア訛りが乱れ飛んでたくらいで、と

にかく多かった（笑）！結局、俺達3バンドそれぞれ違うスタイルのバンドだから、凄く上手くいったよ。

——そう、3バンド全て違うから、どうしてこの3バンドがひとつになったのかなって思ったの。

クリス：だからこそ良かったんだよ。オーストラリアにもいろんなスタイルの音楽があるってことを気付いてもらえたからね。オーストラリアの音楽のショーケースとしてはいい出来映えだったと思うよ。俺達はただステージに上がって35分プレイして、基本的にはそれだけだよ。みんなの前に立ってプレイして、あっと言わせるっていうね。それはどのツアーだろうが一緒さ。

——ドラマーのアンディ（・ストラッカン、dr.）は、ジェットのおかげで二日酔いの日々だったって書いてたわ。

クリス：悪影響だよね（笑）。まあ他にも色々あっただろうけど…これってファミリー向けの雑誌だっけ（笑）？まあとにかく、あのツアーではみんな仲良くしてたし、それが問題だったんだろうね。だってあまりにも仲良かったから、毎日一緒に飲んじゃって。ジェットのバスで朝まで飲んでたことも何度かあったなあ。いいわけないよね、そんなの（笑）。何時間か後には苦しむってことが分かってるんだし。だけど、そういう理由もあってあのツアーはこれまでで一番楽しかったツアーでもあるんだ。ショーと同じくらいそれ以外の部分も楽しかったから。そういうのが全くないツアーもあるからさ。そうであってもショーは続けるけど、ショーで1時間くらいエキサイトしてるのに、ショーが終わってからは別に何もすることなくただ座ってるだけっていうのは、ちょっとね。だけどそのツアーではとにかくみんな仲良くしてて、凄くいい友達になれたんだ。だからツアーが終わったことも残念だよ。まあでも何にでも終わりは来るわけなんだけど。

——じゃあクレイグ・ニコルズ（ヴァインズ）はどうだった？彼はなかなか気難しい人みたいだけど。

クリス：彼は凄くいい奴だよ。

——彼って誤解されてる部分が多いと思う？

クリス：それは絶対にあると思う。クレイジーだって思う人が多いんだけど…普段の彼とは全然違う印象を持っちゃうんだろうね。

——でも、どうしてかしら？

クリス：それは彼がそういう印象を与える時もあるからさ。

——私が彼にインタビューした時は、1日の終わりだったから疲れてる印象はあったけど、それでもいい人だったわよ。だけど他の雑誌には、彼はクレイジーだとか、自信過剰だとか口が悪いだとか書かれてるの。

クリス：彼は正直な人間なんだと思う。機嫌が悪い時は悪いし、機材を壊したりすることで嫌悪感を抱く人もいるかもしれない。だけど俺は彼のこと凄くいい奴だと思うし、物静かでそういう印象とは全然違う奴だぜ。素晴らしいアーティスト、そして素晴らしいソングライターだしね。ただ自分らしくいようとしてるだけだと思う。

——ツアー中にはそういうトラブルを目にしたりすることはなかった？

クリス：全然。別にそんなに飲むってこともないし、一度なんてバックステージでみんなで飲んでた時に、食べ物投げたりして遊んでたんだけど、それでも別に彼がクレイジーになることはなかったしね。

——このアルバムは「モダン・アーティラリー」っていうタイトルだけど、アーティラリーって武器の一種よね（大砲）。それで誤解されたこともあるって聞いたけど、どんな風に誤解されたの？政治的な見解を訊かれたりとか？

クリス：確かにそれを話題にされることも多かったけど、そういう意味からは凄く離れたところにあるから。音楽が俺達の武器で、曲は俺達にとってロケットみたいなものっていう意味なんだ。このアルバムで書いたのはいい曲ばかりだし、バンドとしてもずっと強くなって戻ってこれたし、アートを作っているってことが素晴らしいと思った。だから、このタイトルはただ単なる言葉遊びなんだけど、多分タイミングなんだろうね、このタイトルと戦争を結びつけて考えられちゃうんだ。

——特にアメリカをツアーしてたら、マスコミはタイトルについて訊きたくなると思うわ。戦争反対だとかね。

クリス：でもそれは両刃の剣でね。この戦争に賛成してるかしてないかは置いておいても、イラクに赴いて自分の仕事をしてる軍の人達のことは尊敬してる。だけどこの戦争は…何ていうのかな、凄くわけが分からないというか。どう考えていいのか分からないよ。まあ、戦争と音楽は分けて考えたいと思ってるんだ（笑）。

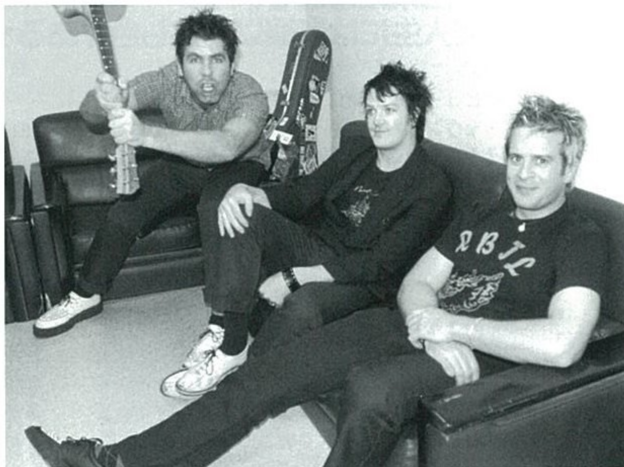
——あなたの出身地オーストラリアは、この戦争ではいわゆる第三者じゃない？

クリス：ああ。だけどオーストラリアの兵士達はイラクには大勢派遣されてるよ。

——アンディは、“俺達はみんな戦争が嫌いだ。戦争なんて最悪だよ”って言ってたけど。

クリス：そのコメントだけ聞くと、まるで5歳児のコメントだけど、それがまさに真実なんだよね。それ以上複雑にすることなんて何もない、とにかく酷いことだしね。俺達ってパンク・バンドだって思われてるけど、自分ではどっちかっていうとヒッピーに近いんじゃないかって思うんだよね。“ピース＆ラヴ”だよ。俺はどんな暴力も嫌いさ。

——あなたの書く歌詞を読んでると、どうしてこの曲をアルバムに入れたのかしらって思うものもあるんだけど、それが凄くバカな女の子についての「ワン・セッド・トゥ・ジ・アザー」って曲なの。どうしてこの曲を収録したの？



更に強くなって戻ってこようと思ってたけど、
俺達のことを過去の人間にしちゃう奴らもいた

クリス：これはね、ちょっと頭が足りない女の子についてなんだけど。

——この曲を入れる利点って何なのかしら？

クリス：分からないけど、まあただキャッチーな曲のひとつとしてだと思うよ。コーラス部分はふたりの男の会話みたいな感じで、ひとりが、“心配するな”って言ってるんだ。俺達が住んでるメルボルンに、チャペル・ストリートっていうトレンディなストリートがあるんだけど、その辺には凄くニセモノくさい人工的な人間が大勢いるんだ。中身がないっていうかね。ヤングアダルトって感じかな。他人を見下してるっていう感じでね。

——若い時って経験値が低いから、いい気になりやすいのかもしれないわ。

クリス：そういうのもあるけど、男と適当に遊ぶ女の子とか…ね。

——じゃあ「ライジング・アップ・フロム・ジ・アッシューズ」はどう？この曲は凄くディープな曲よね。特に、これは病院のベッドの上で書いたんでしょ？

クリス：いや、ベッドで書いたんじゃないんだけど、そういうことには負けないっていうことについて書いたのは確かだよ。業界の人達からは、事故の後、これでバンドは終わりだなって思われてたりしたし。

——あなた自身はそう思ってたの？ドラマーが辞めちゃった時でも、新しいドラマーを入れればいいじゃないって私は思ったけど。

クリス：確かにそうだけど、それまでに凄く成功してたから、俺は日本に行くことはもうないのかもしれない、とか、世界中をツアーすることはないのかも、とか思ったりしたけど。

——あなたって悲観的な人なの？

クリス：実はそうなんだ（笑）。

——その時の状況で悲観的な気分になっちゃったのかしら？

クリス：そうだと思う。俺達は、こういうことを乗り越えて更に強くなって戻ってこようと思ってたんだけど、俺達のことを過去の人間にしちゃう奴らも実際にいたからね。だからそういう気持ちを曲にしようとしたんだ。凄く心に響く曲だよ。

——あの歌詞を読んで、凄く感動したわ。あなたはいつも自信に溢れてて、音楽に対しても情熱的じゃない。だけどそんなあなたでも落ち込むことがあるんだなって。

クリス：俺にだってコンプレックスはあるし、他のバンドを観て、“到底あんなに上手くなれない！”って思っちゃうことだってある。だからアンダードッグの根性っていいもんだと思う。俺たちより素晴らしいバンドなんていないって思ってるよりも、前進する可能性があるわけだからね。俺はね、常に勝ち続けることが必ずしもいいことだとは思わないんだ。自分のことを信じて自信を持ってなきゃいけないけど、自信を持ちすぎるのは良くないと思う。

——さっき凄く成功した時を経験したって言ってたけど、今のあなた達はどんな感じなの？このアルバムはオーストラリアでも順調だって聞いたわ。

クリス：オーストラリアでは既に3枚のアルバムを出して凄く成功してるから、今のもかなり調子がいいよ。だから俺達もまだビッグなバンドではある。俺達と同じくらいの時にデビューしたバンドで、もうシーンにいないバンドもいるけど、俺達は何とかシーンにも残ってるからね。フェスティヴァルのヘッドライナーになって、ヒットソングを10曲くらいプレイ出来るくらいだし。自分達がどうやってここまで来たのかは分からないけど、一生懸命頑張っていい曲を書こうとしたし、それがオージー・インベージョンに繋がったと思う。ジェットとかヴァインズとかの新しいシーンの中にも、俺達がいるんだよ。それが俺達なんだ。オーディエンスとも共感出来るし、まだフレッシュなバンドとして認識してもらってる。もうデビューして6年くらいになるのにね。だけどこれで終わりってわけじゃない。このアルバムだって最高3位だからね。次のアルバムへのアイディアも沢山あるし、絶対にもっといいものになるはずさ。

——3位ってあなたにとってはいいこと？それともあまり良くないのかしら？常に1位じゃないといけないの？

クリス：1位になりたい1位になりたいって思い詰めると、ならなかった時に凄くがっかりするよね。俺達は8位くらいになるかなって思ってたんだ。だから3位になったのでも、嬉しいと思ってる。俺達ってオルタナティヴのバンドだけど、オーストラリアではメインストリームとして認められてるんだ。ステージに立つと凄くアグレッシヴでヘヴィで騒がしいから、そうやって認められたことが凄く驚きでもあるんだけどね。だけど俺達の場所があるってことは、いいことだよね。

——オーストラリアに戻ってからのプランは？

クリス：この後に9週間アメリカ・ツアーをするんだ。アメリカのレーベルと契約をしたから、アメリカでも活動しなきゃいけないからね。だけどアメリカでのツアーが終わったら、オーストラリアに戻って出来るだけ早く次のアルバム作りに取りかかりたいんだ。ブレイクなしで、出来るだけ早くリリースしたいんだよ。

5月11日　名古屋にて収録

THE VINES

"お騒がせ"初来日記

(5月18日〜22日)

REPORT：CHEEKY／TOSHIBA EMI

5/18(火) 朝、ロンドンから到着。"Welcome to Japan" といつものように手を差し出すと、みんな疲れた笑顔で手を握り返す。ただクレイグだけは人に手を触られるのが嫌なようで、手を自分の胸のところにひきつけたまま、頭を左右に振った。ホテルに向かう車の中でクレイグ、マクドナルドを食べる（噂通り、クレイグはこの後も口にしたのはほとんどマクドナルド＆コーラでした）。ホテルに着くとちょっと休んでから、渋谷のレコード店へ。空港での出会いからホテルにチェックインする時点迄で、既にクレイグはかなり変わってるな…神経質で、反応も読めないし、何をするかわからない…といったものを感じたが、このレコード店にいるわずかな時間で、その予感はかなりのとまどいへと変わった。なぜなら、クレイグは時折こちらに話しかけてくるのだが、ひどく早口に周囲への不満のようなトゲを含んだ発言を繰り返すからだ。

5/19(水) クレイグの状態が読めないので、スタッフは緊張と不安のまま会場入り。ライヴは10分遅れでスタート。まず、"本当にライヴはやるのか？ステージに立つのか？演奏するのか？"ということから不安だったが、予想通りにこの日のライヴは荒れに荒れた。クレイグの状態はかなり悪い。混乱しきって観客を罵倒するような発言を繰り返すし、後半は歌にならず叫んでいる…という感じ。そんなクレイグの状態に耐えられなかったのか、途中パトリック、ライアンがステージを後にするというシーンも。終了後楽屋に行くと、日本人クルーの部屋にがっくりと肩を落としたパトリックの姿が。"大丈夫？"と声をかけるが、かなり落ち込んだ様子。なぜかその後もクレイグ以外のメンバーが続々日本人クルーの部屋にやってくる。クレイグはひとりで楽屋にいるらしい。あとで覗くと、壁にマジックでずっと絵を描いていたようだ。ホテルに戻り、パトリックとライアンはクルーと一緒にホテル近くのおすし屋さんへ。

5/20(木) 大阪へ移動。ファンには昨日も優しかったクレイグ、この日も見送るファンの方々に笑顔を見せているが、相変わらずこちらに口を開くとトゲのある発言もしたりする。みんなと離れ、ひとりで座ったクレイグは新幹線の中ではきわめて静か。ただ、やはり緊張状態は続いているようで、大阪についてから、自分のお気に入りのスケートボードを持っていかれそうになると（といっても車の後ろに積もうとしただけなのですが）ちょっと声を荒げたりする場面も。どうやら自分、それから自分のものに対して、人一倍神経質なよう。いつものようにホテルの部屋にこもるクレイグはそっとしておいて、他の3人はホテル近くの和食屋へ。夕飯の席でも話題はまずクレイグ。4カ月ツアーを続けてきて、クレイグの調子も良かったり、悪かったりのようだが、どうやら今回の日本はかなり悪い状態のようで、周りもクレイグをどう扱ってよいのかわからない＝そっとしておこう…ということのようだ。こちらは数日のことだけど、この人たちはいつもこんなハラハラ危ない状態につきあっているんだものなあ…。

5/21(金) この日のライヴもどうなるんだろう…と心配したが、どうやら東京よりずっと調子が良かったようで、クレイグの様子も一変。ステージ上からオーディエンスにこの日は何度も "Thank you" と。よ、よかった……。ライヴ後、クレイグが、"今日は僕もみんなと一緒にゴハンに行こうかな" と言うと、一瞬にして周囲が凍る。クレイグと一緒＝何がおこるかわからない＝リラックスできない、ということのような。上機嫌のクレイグも一緒に和食屋さんへ。クレイグは結局コーラを飲み、2，3料理をつついたら、ホテルに戻るというヘイミッシュと一緒に早々にホテルに戻っていった。クレイグがいなくなった途端、場の空気が緩む。真夜中になぜか偶然道でクレイグを目撃。"あれ!? 部屋に閉じこもってCD聴いてるんじゃなかったんだ…"と意外だったが、反面、"良かった、クレイグなりに日本をエンジョイしてるんだな"とホッとする。

5/22(土) 大阪から東京に戻って成田へ。最後ゲートに行くときに、みんなとお別れの挨拶。ありがとう、とみんながハグする中、最後にクレイグがこちらにぼんやりとした笑顔で "Thank you" というので、つい右手を出すと、不思議なことにクレイグも空いている左手で握手をした。暖かい手だな、と思うと同時に、あれだけ他人に触れられるのが嫌なクレイグだったのに、気まぐれなのか、それとも若干こちらに慣れてくれたのかなあ…と思いつつ見送った。

ASH

ロンドン・ライヴ・レビュー

May 30th at Hammersmith Apollo

REPORT & PHOTOS：P.G. BRUNELLI／INROCK

コントラストは大事だ。前日にこのハマースミス・アポロで行われたマイケル・ブーブレのコンサートは、会場内の仕切りもなく、オーディエンスはみんな大人しく席に座っていた。しかし今夜のアッシュのライヴは、ワイルドなロック・ファン用にセットアップされている。全席スタンディングの為、会場内はきっちりとバリケードで仕切られている。そしてこのヴェニューは、ロンドン内でもモッシングが唯一禁止されている所なので、モッシングをやろうとするだけでも叩き出されてしまう。ニュー・アルバム「メルトダウン」を引っさげて行う、アッシュにとってこれまでで一番ビッグなライヴとなるこのショーは、セットが少々変わっている。ライヴによくあるような、バンドの後ろに下げてある垂れ幕のようなものがなく、ヴェニューの煉瓦の壁が剥き出しになっているのだ。そして照明も暗目でムードたっぷりなので、まるで大きなガレージの中でプレイするかのようだ。この薄暗い雰囲気の中で、アッシュは最初からテンポの速いロックを展開し始めた。僕は個人的にもアッシュは好きだが、彼らの曲だったら何でも好きというわけでもなく、エキサイティングな曲もあれば、つまらない曲もある。このショーでは、これまでのキャリアで発表してきたものを全ておさらいしている…しかし「ニュークリア・サウンズ」以外、だが。どうやらこのアルバムは無視する方向のよう。もしかしたらいい思い出はないのかもしれない。さて、新しい曲はかなり元気がいいものばかり。「イーヴル・アイ」や「クローンズ」はかなりいいサウンド。「ウォント・ビー・セイヴド」を除いて、ニュー・アルバムから全曲をプレイしていた。テンポの速い曲をひとしきりプレイした後で、「レネゲイド・カヴァルケイド」をプレイすると、そのおかげでベースががらっと変わってすっかりスローダウンし、ゆっくりと音楽を楽しむムードになった。その瞬間、このバンドにとってリック・マクマーレイがどれだけ大事な要素となっているかが分かった。ステージでプレイしているどの曲も、リックの素晴らしいドラムテクがカギとなっているのだ。それは速い曲だけでなく、センチメンタルでスローな「スタークロスト」でもそのドラムテクが活きていた。それぞれの曲にいろんな顔を与えていて、至って普通の曲と言える「ジーザス・セイズ」も、それ以上に素晴らしい曲になっていて、これは他のバンドには出来ない芸当だろう。シャーロット・ハザリーとティム・ウィーラーは、リード・ギターを交代にプレイしているが、ふたりのプレイ・スタイルが酷似しているのに驚く。まるでそれぞれ違うスタイルでプレイするよりも、出来るだけ似たスタイルを築く方が大事だと言わんばかりだ。そして、古い曲と新しい曲の違いもかなり明らかだということにも気付いた。「カン・フー」はほとんどパンクだし、「ゴールドフィンガー」は、そのストレートすぎるところ、そしてシンプルすぎるところが古さを感じさせる。唯一の例外が、「トレイラー」からの「ジャック・ネイムズ・ザ・プラネッツ」だ。まるで骨まで貫通した弾丸のようで、ヘヴィなところがかなり来る。古いものに比べると新しいものは全て、もっと入念に作り上げられている感じがする。そして古いものと新しいものの中間は、「フリー・オール・エンジェルズ」からの曲と言えるが、これもまた他とは違ったポップなフレイバーが感じられる。「シャイニング・ライト」はなぜかオリジナルよりもスローでドリーミーなムードで、「ウォーキング・ベアフット」は、ほとんどがオーディエンスが歌っていたようなものだった。「フリー〜」のファンが、ニュー・アルバムを気に入ってくれないんじゃないか、というティムの心配は、どうやら無駄に終わったようで、新曲も温かく…いや、熱狂的に迎えられていた。バンドとしてどんどん成長を遂げていくアッシュのバンドとしてのカリスマ性は、どうもティムの普通の男の子っぽさとバランスが良くない。ティムはとてもいい奴なのだが、ステージではそんなにでしゃばることがないせいかスターとしてのオーラが感じられず、どうも存在感がないのだ。放課後に家に帰ってきてミルクを飲んでいる少年のように、普通すぎるほど普通だ。これがいいことなのか悪いことなのかは分からない。ただ、そういう雰囲気なだけなのだから。この夜は、「メルトダウン」からの「オルフェウス」と、大きなヒットとなった「バーン・ベイビー・バーン」で幕を閉じた。いい曲だ。アッシュはまだまだ登り調子だということを確認出来たショーだった。